

# 地域共生社会を目指す人



大塚竜自さん



江澤勇介さん

# チャレンジする人 レジャー遊び場を作る

「自分の求める場がないから作る」  
それができるのは豊かなこと



暮らしの編集室  
ホームページ

合同会社「暮らしの編集室」の江澤勇介さんは、空き店舗を改装したシェアキッチン「ケルン（写真上）」、北本団地「中庭」など市内外から人が集う「場」を開いてきた。その原点が、空き家を自分たちでリノベーションした「アトリエハウス」だ。アーティスト・LPACKのプロジェクトとして始まったこの場所は、コーヒーの提供や作家の作品展、マーケットの開催等を手探りで、アーティストやデザイナー、農家や近所の人たちが出入りする空間になった。庭の梅の木から梅干しや梅酒を作ったり、借景で北本自然観察公園の緑を楽しむ中で、友だちに「最高じゃん！」と喜んでもらうと、次第に「北本っていいな」と思うようになったという。アトリエハウス解散後も、場づくりを意識的に行うようになった。「そこに『居る』『過ごす』っていうこと自体に価値を生み出すのが面白いなって」

江澤さんが大事にしているのは、

もともと居る人たちが居づらくならないようにすること。「おしゃれなお店を集めたいわけじゃなくて。もともとそこにあったモノ・コト・ヒトと、たまたま北本に集まった人がつなげて面白くなるような、成り行きを大事にしたい」と語る。北本団地に『中庭』ができること、『中庭』にはない手作り品の販売やギャラリー展示ができる場が作りたいとの声が集まり、まちの工作室『てと』が生まれた。一つ場所ができること、一人一人の「自分が求めているのはこれじゃない」が可視化され、次の場所へつなげていく。「やりたいことがやれる、転んでも大丈夫な場所を作るのは上の世代の役割かなと。そこで若い子たちがチャレンジしてくれるのはすごく嬉しい」「ケルン」や『中庭』で活躍する「次の世代」に、かつての自分を重ねる思いもある。「僕もそうでしたけど、求める場所がないなら自分たちで作ってみるのが一番いい。きつと暮らして楽しくなるはずですよ」

北本市社会福祉協議会の大塚竜自さんは、高齢者の介護予防や見守り、その先の地域共生社会の実現を目指し、さまざまな居場所づくりを仕掛けている。担い手養成講座の開催や、助成金等の情報提供、市内の居場所情報の収集や発信、また実際に自ら現場の居場所づくりにも携わる。目指しているのは、子どもも高齢者も「こちゃま」になる居場所だ。

「子ども食堂にシニアを活動者としてマッチングしたりとか、高齢者だけで集まるよりもいろんな世代が集まる方が理想です。高齢者も喜んですよね、若い人や子どもがいると。色んな世代が交わっていくのを見るのは自分も楽しいなと思います」と大塚さんは語る。社会福祉協議会としては、地域の居場所づくりの後方支援がメインだが、大塚さんは「つつい自分でもやりたいなってまう」と語る。その一つが、北本団地『中庭』で月1回開催する『福祉と暮らし」

高齢者も子どもも  
障害のある人も、  
こちやまぜなのが当たり前



北本市社会福祉協議会ホームページ



きたもとつながるフードパントリー



きたもとこちやまぜの会



まちの工作室「てと」



アトリエハウス

きたもとこちやまぜの会 Instagram @ gochamaze\_kitamoto